

(こくさいか山口 2004年10→12月号掲載記事)

～「冬のソナタ」が我々に伝えるもの～

下関市総合政策部国際交流課
(釜山広域市派遣職員)
古川 力

釜山市内の観光地である西面や海雲台，南浦洞あたりでは，連日，観光パンフレットを持ったたくさんの日本人観光客を見かけます。本年韓国を訪れた日本人観光客は空前の数となるようです。

韓国のことを「近くて遠い国」などという表現を，現在どのくらいの人達を感じているのでしょうか？

空前の韓国人気をもたらした「韓流」ブームの火付け役，「冬のソナタ」は，単なる「ドラマのヒット」だけではなく，日韓関係にも新たな，大きな扉を開こうとしています。私は昨年，日本でこのドラマを見て，感銘を受けた一人ですが，いわゆる「冬ソナ」が日本にもたらしたものについて，韓国にやって来て感じたことについて考えてみたいと思います。



釜山市の地下鉄の様子
(ハンゲル表記を除けば日本の地下鉄と何ら差はありませんが、乗っているといろいろな習慣の違いがあります)

韓国の公共交通機関を利用するとよくわかりますが，こちらの若者がお年寄りに席を譲るスピードは日本と比べて非常に速いのにびっくりします。

日本ではもちろん，親切に譲ってあげる方はおられますが，席を譲らない人もいるかと思えば，譲ろうとする人に「私はまだ若いんだから，年寄り扱いしないで」といって断る人もおられます。

韓国でも，最近，高齢者に席を譲らない若者も増えてきたなどという話も聞きますが，いわゆる「高齢者・身障者専用席」には，若者は席が空いていても座りません。席が空いたからといって一旦座っても，お年寄りが乗ってくると「どうぞ」などという前にすぐに立って席を空ける。これには本当に感心させられます。

また、座っている人が立っている人の荷物を持つのは韓国では結構当たり前です。たとえば、少し大きくて重そうなかばんを持って立っていると、「ここに置いてください」と言って、目の前に立っている他人の荷物を膝の上ののせて持ってあげるのは。最初はちょっとためらいましたが、数回体験しました。ですから、私が座っているときには人の荷物を持ってあげるようにしています。

一方で、NHKの韓国語テキストの中で紹介されていたそうですが、いわゆるスポーツ新聞等に掲載されているような風俗関係の広告とか、性的な漫画等を電車やバス等、公衆の前で読んだりすることを日本では結構目にするものです。若者というより、年配の人にこういった習慣が浸透しているのも少々問題ではあります。が、ここ韓国ではまずない、できないそうです。

良い物は良い。良くない物は良くない。このあたり、日本よりも道徳的・常識的な教育が韓国はかなりはっきりと浸透しているような気がしてなりません。韓国人達は、日本人よりも年上の人達を大切に、「苦しいことは分かち合う」精神が日常的に浸透していると言えるのではないのでしょうか。

さらに、これに加えて、韓国と日本の決定的な違いは、韓国が、男性に2年間の兵役を義務付けていることです。多くの男性は大学に入学し、第1学年が終了すると大学を休学し、軍隊に入隊します。そこから2年間の兵役を経て第2学年に復学する、というものです。韓国人男性に聞くと、多くの人は「今まで一番苦勞した思い出は軍隊生活」「軍隊の時は、本当につらかった」「大学に戻ってからが大変だった」と口をそろえて言います。大学に入ったのはいいけど、そこから2年間を国のために働く、というのは、経験のない自分には何とも想像しにくいですが、そういった義務が課せられているからこそ、自分の将来のことを真剣に考えている人も必然的に多い気がします。5年前、10年前と比べると最近では少々変化もあるようですが、例えば軍隊入隊時には、それまで付き合いしていた女性とも別れる人も多いとか。

自己のアイデンティティーを若いうちに確立でき、そのためにどのようなことをしなければならぬかがしっかり出来上がっている、こういった若者の比率が多いほど、その国は発展するエネルギーを多分に備えることができます。

日本で兵役があれば、というのは愚問ですが、韓国ではこのシステムが社会のいろんな秩序を維持させていくのにうまく作用しているような気がします。女性たちも自国の男性が兵役の義務を負っていることを理解しているから、社会のいろいろなシステムや秩序がよりよく保たれているとさえ思います。



釜山の一般バス車内の様子
釜山市を走る公共バスは、「一般バス」「座席バス」の2種類があります。

日本で大ヒットを遂げた韓国ドラマは、純愛や人間としての真の部分が直接的に描かれているので、ただ単に俳優の人気だけでなく、今の日本人が忘れかけている「何か」を呼び覚ましたのではないかと感じています。他に流されずに自分自身をしっかりと持ち、その上でいろいろな困難や問題に立ち向かっていくところなどが描かれたドラマが、韓国ではごく常識的で当たり前のことだからこそ、「韓流」なのではないかと思えるのです。

「冬ソナ」が、日本人に対し「自分を見つめなおす」きっかけを作ってくれた、という結論はいかがでしょう。韓国の人達が「私達をよく見てください」と、アピールしているようにも思えます。韓国の人達は日本や日本人のことを大変よく勉強し、知っています。しかし、日本人は韓国や韓国人のことを彼等が私たちのことを知っている以上には知らない人が多いように思います。我々が、特に次世代を担う若者達が、自分を今一度見つめなおし、韓国や韓国人のいいところを学び、お互いに切磋琢磨していくことができたなら、日韓関係はもちろん、日本もさらに大きく飛躍できるような気がします。韓国に遊びに行く時、ショッピングや観光・グルメだけでは、少々もったいないのでは？もう一步、韓国の内面に踏み込めたら、日本もさらに変わるのでは、ということ韓国ドラマが教えてくれているのではないのでしょうか。

「韓流」ブームに乗って、韓国ドラマや映画・音楽は次々と日本にやってきているようですが、私も当地赴任中、本場の「韓流」にできるだけ触れ、もう一度自分を見つめ直してみようと思っています。